〔尤も此の名は獨り回教徒の著者の間に於てのみならず、近時に至る迄學界に紹介せられたる所にては、トルコ族自からの史料の上にも出現すること極めて稀にして、僅かに突厥の默棘連可汗の碑文中に一ヶ所（前述参照）と、Kara Balgassun の九姓回鶻可汗紀功碑中、突厥文字を以てせる碑額中に一ヶ所と存するに過ぎず、かの回鶻語を以て書かれたるものなりと稱せらるゝ Kudatku Bilik の中に於てすらも、此の名は一回も現はるゝことなく、[5] 極めて奇異の現象と認められたりしが、然も此の如きは、要するに從來彼等自らの史料の存するもの甚だ少かりしに歸因するものにして、今日にては未だ多數と稱すべきには非ずと雖、余輩の知れる限りに於ても、此の名を記せる文獻の新たに知られたるもの數個を加ふるに至れり、即ち高昌の廢墟より獲られたる所謂回鶻文字の摩尼教文書[6]中、牟羽可汗に當ると認めらるゝもの〻稱號中に Uiγur χaγan、また同種の文書中に Uiγur Buγuγ (Boγuγ) χan 及び Uiγur iltäbär なる名見え、[7] 別に我が大阪奥平氏の所有にして、近く余輩の見るを得たる貨幣にも Buγuγ uiγur χaγan なる名の存するあり、[8] されば今日に於ては uiγur なる名がトルコ族の間に於る文獻中に用ゐらるゝこと稀なりしならんとは認め得べきに非ず、今後彼等の史料の增加するに從がひ、此の名に遭遇すること益〻多きを加ふるに至るべきは疑無き所なりとす」[補8]

然るに、九世紀十世紀頃の回教徒著者は別に tγzγz なるトルコ族の名を記せり、[9] 此の名は初めは Taghazghaz と讀まれ、而して其の住地風俗等より考へて Uiγur に當るものなること、既に Reinaud 氏の論證したる所なりしが、Grigorieff 氏は初めて之を Toγuzγur=Tokuz uiγur（即ち 9 uiγur）と讀み、Uiγur の名の傳へられるものとし、一時學界の賞讃を博したりしも、然も Nöldeke 氏は別に九世紀の Pahlavi 語にて書ける書物を引證し、明らかに